

平成21年 5月 27日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2006年～2008年
 課題番号：18520335
 研究課題名（和文） ポストコロニアル香港における
 ミックスコード（中英混合語）の意義と役割に関する研究
 研究課題名（英文） How and Why They “MIX” Chinese and English in Hong Kong
 — in the Postcolonial Period —

研究代表者
 金丸 芙美（KANAMARU FUMI）
 東京理科大学・工学部・講師
 研究者番号：40366430

研究成果の概要：本研究はイギリス植民地から中国という社会的構造の変化は、言語活動にどのような影響を与えたのかを、ミックスコード（中国語と英語の混合語）を中心に、分析した。特に、大きな社会変化を経た香港人の、広東語、英語、普通話それぞれに対する心理的態度を明らかにし、ミックスコードへの意識変化の可能性を追求して、その意義と役割について考察した。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	600000	180000	780000
2007年度	500000	150000	650000
2008年度	500000	150000	650000
年度			
年度			
総計	1600000	480000	2080000

研究分野：言語学

科研費の分科・細目：言語学

キーワード：社会言語学 ミックスコード マルティリンギズム 言語の機能 言語態度

1. 研究開始当初の背景

当時、香港では英語と中国語の混合語が、行政側によって不当に評価されていると感じられた。例えば、1990年にECR4（教育統籌委員会第4号報告書）で、英語を教育媒体とする英文中学が全体の9割から3割に減らす提案がなされたが、その理由として問題になったのが、英文中学で教育媒体として英語だけが原則であるのにミックスコードで行われることが多いという現実であった。そして中途半端な教育媒体のために香港の学生の英語力と学力が低下するという見解が示された。

Gibbons(1983)は、香港人の言語態度につ

いて、心理学的実験を行った。大学生に、同一話者が、英語と広東語と広英混合語それぞれで録音した声を聞かせて、その話者の印象を測るという実験をした。その結果「広英混合語の話者はステイタスがあり、ファッションブルだが、中国的な謙遜の精神に欠け、傲慢で、感じが悪い。」というイメージになった。

しかし、ミックスコードは本当に問題なのか、むしろ、香港人の自然なコミュニケーションコードではないのか、という疑問が生じた。従って、本研究ではミックスコードがいかに自然に香港の言語活動になじみ、機能的に意義を持って様々な場面で使用され、好意

を持たれているかという実態を示そうと試みた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、香港人の言語活動に見られるミックスコード（広東語/中国語と英語の混合語）に着目し、そのメカニズムとそれに対する言語態度を分析することにより、ポストコロニアルの香港の言語状況の一端を明らかにすることである。

研究内容は二つに大別される。第一に、現代の言語活動（特に書き言葉）の諸相を考察する。特にミックスコードを中心に、イギリス植民地から中国という社会的構造の変化は、言語活動にどのような影響を与えたのかを分析する。第二に、大きな社会変化を経た香港人の、広東語（母語）、英語（かつての統治者の言語、今なお公用語）、普通話（帰化した中国の共通語、書き言葉としての公用語）それぞれに対する心理的態度を明らかにしつつ、中でも特にミックスコードへの意識変化の可能性を追求する。

3. 研究の方法

(1) ミックスコードの分析

本研究は、ミックスコード（中国語と英語の混合語、以下 MIX と略記する）を中心に、イギリス植民地から中国という社会的構造の変化は、言語活動（特に書き言葉）にどのような影響を与えたのかを分析する。まず、香港の言語、社会に関連する書籍と雑誌を収集する。特に（一般的に広く読まれている）大衆的な雑誌と中国語新聞を分析対象とする。

(2) 言語態度の分析

大きな社会変化を経た香港人の、広東語、英語、普通話それぞれに対する心理的態度を明らかにする。中でも特に MIX への意識変化の可能性を追求する。返還後の香港人の、広東語、英語、普通話それぞれに対する心理的態度について、香港人にインタビューを行う。また、それぞれについて質問紙調査を行う。

(3) 言語教育の変化の分析

インタビューより「返還後社会と言語に関する最大の変化は学校教育だ」という新しい知見を得た。そこで、学校教育において、広東語、英語、普通話がどのように教えられているかを明らかにする。香港の学校を訪問して参観してビデオ撮影し、教師へのインタビューを行う。

4. 研究成果

(1) MIX の分析に関して

新聞や広告を資料として MIX の意義や語用論的意義を Luke (1998) と Li (2003) の分類に基づいて分析した。

① Luke(1998) の分類は空所を埋める「expedient(方便的)mixing」と特にと教養や西洋らしさを見せようとする「orientational(目的志向的)mixing」の二つがある。

方便的 mixing は、例えば、「pizza」、「program」など、低広東語（広東語の口語）にない語を補うことが主たる動機である。一方「billiard」「husband」が使われる場合は、低広東語に相当語があるので、目的志向的 mixing である。Luke(1998)の分析は空所を埋める方便的 mixing の場合には、新概念を補うためなのだから必然的な言語行為である。目的志向的 mixing の場合には特にと教養や西洋らしさを見せようとする特別な目的がある。

②Li(2003)は、MIX をコミュニケーションの機能によって、婉曲、一般化（特殊化）、シャレ、経済（節約）の4種にわけている。

婉曲は広東語で言うところの婉曲表現に英語を用いる婉曲語法である。例えば、「bra」の相当する広東語は「胸單(hung1 zaau3)」「乳單(jyu5 zaau3)」などいくつかあるが、英語を使うことによって、露骨さを避けた表現に変わっている。

一般性と特殊性とは、ある英語表現が、それに意味が近い広東語の同義語よりも、一般的であるか、或いは特殊であるかによって、使用されることである。例えば、広東語はファンを「迷(mai4)」という音節形態で表すが、英語と違い、どんなファンなのかを「歌迷」や「球迷」と前置修飾によって明確にする必要がある。しかし「fan」を使うと、「迷」より一般的な意味を持つので便利な解決法になる。

シャレは英語を中国語/広東語に mixing する中で、その言葉に二重の意味を持たせる語法である：

星光 閃閃 有得 FUN

(あなたと楽しんで分かち合うきらめく星の光)

上の例は「fun」が英語の「楽しさ」と広東語の「分(分ける)」をかけた例である。

経済(節約)は英語での表現が、広東語の相当語よりも簡潔なので使用する語法である。例えば「check in」はホテルでは「辦理入住手續」、空港では「辦理登機手續」という広東語になる。これを、「check in」という英語にした方がずっと簡潔である。

・ Luke (1998) と Li (2002) の違い

Luke(1998)の空所を埋める方便 mixing は、広東語にない場合に英語を使っているのだから必然的である。目的志向的 mixing には教養や西洋らしさを見せようとする動機がある。

しかし、Li (2002)は、MIX が必然的であるわけでもなく「教養や西洋らしさを見せる」という特別なものでもなくて、もっと日常的で自然なコミュニケーションの手法として捉えている。

このように、Luke と Li では、MIX 観に明らかな違いがあることに気付いた。

従って、この二つの分類のうちどちらが妥当であるか、それを確かめるには、香港の若い世代のMIX 観を質問紙によって探る必要があるという結論に達した。

(2) 言語態度に関して

2009年3月に香港の基督教宣道会宣基中学(中文中学)にて行われた質問紙調査の結果は次のようなものであった：

被験者は、平均年齢13.5歳、113人(男子48人、女子64人、不明1人)。
両親の年齢は父親44.8歳、母親40.8歳。

言語能力の順位は表1の通りである。

表1：言語能力

	英語	普通話	広東語
話す	3	2	1
聞く	3	2	1
	英語	中国語	
書く	2	1	
読む	2	1	

香港の学校教育において普通話の学習時間は、英語に比べて4分の1以下(英語が週8コマなら、普通話2コマ)であるにもかかわらず、英語よりも能力が高いのは意外な結果である。同じ中国語だというのがその理由だろう。

① 社会における活力

英語、普通話、広東語それぞれの活力に関する質問はGiles et al. (1977)のEV理論(Ethnolinguistic Vitality Theory：民族言語的活力理論)を枠組として、社会言語学的8つの項目における活力を測ったものである。各言語の活力の順位は次の通りである。

表2：香港におけるEV

	英語	普通話	広東語
香港内で	1	2	1
国際的に	1	2	3
メディア	2	3	1
学校	2	3	1
ビジネス	1	3	2
宗教	2	3	1
公共機関	1	2	1
将来	1	2	3

英語は香港内、国際、ビジネス、そして将

来にわたっても、最も活力ある言語と考えられている。他方、広東語は香港内で英語と同等、そしてメディア(テレビ)、学校、宗教面で最も活力ある言語である。普通話は、国際的と将来においては、活力が広東語に優っている。

次に主成分分析結果を表3に示す。

表3：香港におけるEVの主成分分析結果

固有値	4.341	3.313	2.441
寄与率	16.1	11.6	9.0
累積寄与率	16.1	27.7	36.7
変数	第1主成分	第2主成分	第3主成分
香港内で	+英語	+普通話	
国際的に	+英語		+広東語
	+普通話		
メディア		+英語	
		+普通話	
		-広東語	
学校	+広東語		
ビジネス	+英語	+普通話	
宗教		+英語	
		+普通話	
	+広東語	-広東語	
公共機関			+広東語
将来			+広東語

注：+、-と言語名は、その数値が0.4以上である言語であることを示している。

第1主成分は、国内、国際社会、ビジネス社会という公の世界での英語や普通話の重要性と、学校や宗教場面という被験者にとって身近な場面での広東語の重要性を表す成分であると解釈できる。

第2主成分は、メディア(テレビなど)と宗教場面で広東語の使用と、香港社会、メディア、ビジネス、宗教場面で英語と普通話の使用が逆の傾向を示す成分だと思われる。

第3主成分は、国際、公共機関、将来において広東語使用が同じ傾向を示す成分だと考えられる。

以上より、香港内、国際、ビジネスで重要な英語と、学校、宗教面、そしてテレビの言語として活力ある広東語という地位の傾向が読み取れる。普通話の国際的価値も十分に認識されている。

③ 自分にとっての重要性

自分にとっての重要性に関しては、Allard & Landry (1994)の枠組みに基づいている。

・広東語、英語、普通話の順番である質問項目は次の6項目だった。

「すべての公的サービスはこの言語で与えられるべきである」

「仕事上、この言語を高度に使えるようになりたい」

「この言語はいい感じである」
 「この言語が学校の教育の媒体になるべきである」
 「この言語を使えないと香港では不便」
 「劇や映画をこの言語で見るのが好きだ」
 ⇒自分の生活に密着した言語の順番であると言える。

・広東語、普通話、英語の順

「この言語で話すとき自然で快適である」
 ⇒自分の言語能力が高い順番である。言うまでもなく広東語が断然トップだが、英語より普通話の方が自然に話せる。

・英語、普通話、広東語の順番

「就職するにはこの言語がよくできなくてはならない」
 「香港の繁栄に決定要素となる言語である」
 「この言語は教養人の印である」
 「この言語は香港以外の人々との交流に役立つ」
 ⇒国際ビジネスの中心である香港で役立つ言語はこの順番だと考えられる。

・英語、広東語、普通話の順

「子供がこの言語を学ぶのは大切である」

以上より、香港人にとって広東語を母語として生活しながら、社会生活では英語を最重要と考え、身につけて仕事に生かそうとする姿勢が見られる。そして、普通話は返還後英語を凌駕するような地位を獲得してはいないことが分かった。

② MIXに対する態度

ここでは、香港人がMIXに対していかなる態度を持っているかを測定した。下線が最も多い回答である。

[イメージについて]

「MIXを話しているのを聞くといい感じである」
 非常に賛成 23.9(%) 賛成 58.4
 反対 16.8 非常に反対 0.9

「MIXは教養人の印である」
 非常に賛成 2.7(%) 賛成 32.7
 反対 48.7 非常に反対 15.9

「MIXは香港でのきわめて普通の話し方である」
 非常に賛成 72.6(%) 賛成 25.7
 反対 1.8 非常に反対 0.0

「MIXを話す大人はちょっと傲慢に見える」
 非常に賛成 11.6(%) 賛成 34.8
 反対 42.0 非常に反対 11.6

⇒MIXは、Gibbons(1983)のように、西洋かぶれや傲慢な感じではなくて、今や、きわめて普通の話し方であると認識されていることが分かった。

[MIXの広告について]

「MIXの広告はかっこいい」
 非常に賛成 17.7(%) 賛成 41.6
 反対 37.2 非常に反対 3.5

「この広告を見たらこのコンサートに行きたい気持ちになる」
 非常に賛成 16.8(%) 賛成 39.8
 反対 35.4 非常に反対 8.0

「こんな広告は面白くない」
 非常に賛成 8.8(%) 賛成 20.4
 反対 53.1 非常に反対 17.1

「中国語だけの広告の方がよく思える」
 非常に賛成 13.3(%) 賛成 31.9
 反対 46.9 非常に反対 8.0

⇒全体的にMIXの広告に対するイメージはよい方が過半数である。

[教師のMIXについて]

「先生は授業中にMIXを使うべきじゃない」
 非常に賛成 18.6(%) 賛成 24.8
 反対 46.0 非常に反対 10.6

「先生はMIXを使った方が私たちは数学が分りやすい」
 非常に賛成 10.6(%) 賛成 53.1
 反対 28.3 非常に反対 8.0

「先生がもし英語に広東語を混ぜてくれたらリラックスすると思う」
 非常に賛成 23.0(%) 賛成 46.0
 反対 26.5 非常に反対 4.4

「先生がMIXを使うと英語が進歩しない」
 非常に賛成 10.6(%) 賛成 33.6
 反対 41.6 非常に反対 14.2

⇒教師のMIX使用に関しては、6～7割が肯定的である。

広告はどちらかと言えば英語が混じっているほうがよく見える傾向があり、また授業においても、英語を教育媒体とした中に広東語が混じった方が理解しやすくリラックスするという肯定的な評価が多かった。

かつては大学生が話すU記話は、「英語の専門用語が多く入っていることば」として知られ、一般社会とは違うアカデミックな世界を感じさせることばとして羨望の対象でも

あったが、現在の香港においてMIXは特別ではなくごく普通の言語表現であることが分かった。なかでも、「MIXは香港でのきわめて普通の話し方である」に対して、72.6%が「非常に賛成」だと考えていることをよく認識すべきだ。

③ 言語使用

「MIX」、「英語だけ」、「広東語だけ」の場面による使い分けは、次のようになった。

・広東語が多い場面（5場面）：

父親（に対して）、伯父や伯母、年上の隣人、買い物、銀行や郵便局

・MIXが多い場面（9場面）：

母親、兄弟姉妹、学校の友達、いとこ、学校以外の友達、映画やテレビ、授業、新聞や雑誌、EメールやMSN

・英語が多い場面（2場面）：

授業と新聞雑誌、EメールやMSN

・MIXが多い場面の順番：

EメールやMSN、学校の友達、授業

⇒全体的には、「MIX」が最も多い場面が9場面であり、若い彼らにとってMIXがいかにごく普通の話し方であるかがよくわかった。

そして「広東語だけ」というのは、自分よりも年上の人々に対してである。

言語使用について主成分分析の結果：

第1主成分(固有値:9.653, 寄与率:21.6, 累積寄与率:21.6)は、すべての場面で広東語だけを使うことに関する言語行動、

第2主成分(固有値:4.458, 寄与率:9.9, 累積寄与率:31.4)は、父、母、伯父伯母、いとこ、年上の隣人、友人、銀行や郵便局でMIXを使うことに関する言語行動、

第3主成分(固有値:2.649, 寄与率:5.9, 累積寄与率:37.2)は、英語を年上の隣人に使わないが買い物、銀行や郵便局、映画の場面ではMIXを使うことに関する言語行動の傾向が読み取れる。

従って全体的には、広東語を使う人は生活のあらゆる場面で使用し、MIXを身近な生活場面で使用する人、外の世界に限定してMIXを使う人のパターンが考えられる。

(3) 言語教育に関して

小学校1回、中学校2回訪問した。それぞれの授業をいくつか参観し、教師にカリキュラムや指導法についてインタビューを行った。雑誌論文(2)、(4)、学会発表(1)は、この結果の一部である。雑誌論文(1)、(5)はインタビューと文献による調査で、教育の現場に関する現在の言語背景を把握したものである。

①返還前は英語を教育媒体とする英文中学が9割であったが、返還後は全体の3割に制

限されるようになった。

②Target Oriented Curriculum (TOC)が推進されている。TOCでは、例えば「香港の観光案内」の発表や、「ペットを飼うことが有害かどうか」の討論というように、意味のあるコンテキストの中で、目的を持って英語を使う方式の授業がなされている。教師は英語を100%教育の媒体として、4技能を総合的に教えている。

③各学校に英語のネイティブスピーカーの教師が一人ずつ配置されるようになった。

④小学校、中学の時間割を見ると、英語の時間数と、中国語（広東語）の時間数は8~9時限で、ほとんど同じ時間数を取っている。返還前と異なるのは、普通話 が2時限導入されたことである。

⑤英語教師の資質を向上させるために英語能力と指導力に関するベンチマークテストが導入されている。

⑥しかし、保護者の中には、中文中学では子供の英語学習が不十分だと懸念する者が多い。香港の中では期待が持てないので、子供の英語力をつけるために、オーストラリアなど比較的経済的な負担が軽い留学先を検討する動きが見られる。

⑦返還後中国人が大量に流入することは予想されたが、同伴する中国人児童のために学校や校舎の不足が大きな教育問題となった。

(4) 本研究によって得られた知見

①MIXに関して

本研究では、「MIXは香港でのきわめて普通の話し方である」と認識された。従って、現在の香港においてMIXはLuke(1998)のような特別な用法ではなくごく普通のコミュニケーション表現であると言える。Li(2002)による日常的で自然なコミュニケーションの手法としての分類の方が現代に相応しいと言える。

②言語態度に関して

英語は香港内、国際、ビジネス、そして将来にわたっても、最も活力ある言語と考えられている。他方、広東語は香港内で英語と同等、そしてメディア(テレビ)、学校、宗教面で最も活力ある言語である。普通話は、国際的と将来においては、広東語に優っている。

また、国内、国際社会、ビジネス社会という公の世界での英語や普通話の重要性を認識すると共に、学校や宗教場面という身近な場面での広東語の重要性を意識する者が最も多いことが分かった。

MIXへのイメージは今や特別ではなく、広告などに使われることに対しても好意的である。また、授業においても英語の低下につながるなどのマイナスイメージというよりは、リラックスできる、分りやすいというイ

メージが強いことが分かった。

言語使用に関しては広東語を使う人は生活のあらゆる場面で使用し、MIX を身近な生活場面で使用する人と、外の世界に限定してMIX を使う人のパターンがうかがわれる。いずれにせよ、MIX は特別な言語行動ではなくて、ごく日常的なコミュニケーションの手段である。

④ 言語教育の変化に関して

返還前と現在と言語教育における最大の変化は、英語を教育媒体とする英文中学が全体の3割に限定されるようになったことである。中国となった香港からできるだけイギリスの遺産は取り除かれなければならない。

しかし国際ビジネスの拠点として社会的繁栄を維持しなければならない香港では英語能力は社会の死活問題である。だから、小学校から国語（中国語）と同時間で行われてきた英語教育は返還後も同様である。

また、TOC やネイティブスピーカーの授業、英語教師へのベンチマークテストなど、英語教育の内容を充実させる努力が見られる。

一方、英文中学を制限したことで、英語がエリートのものに限定されている現実は否めない。英文中学に進学できる者が社会の上層で繁栄をリードし、中文中学の出身者は第一線での活躍に後れをとっている。

しかし、言語意識調査が示すように、中文中学の生徒であっても、英語と広東語が混じったMIX を非常に身近なコミュニケーションの表現であると認識していることが分かった。今や、MIX は限られたエリートの傲慢な言葉ではない。

その他、返還後、中国標準語である普通話が学校教育で小学校から週に2時限教えられるようになった。返還前には、返還後中国の普通話が英語にとって代わるかと予想されていた。具体的には、返還前の英語のように、政府の公務などすべてが普通話になり、大学に入るのに普通話の会話能力が試されるようになるのかと思われていた。そして返還後 10 年を経た現在、確かに普通話使用が普及している。しかし英語ほどの地位は獲得していないことが分かった。

⑤ さいごに

Li (2003) はMIX が香港独特のBilingualism であり Biculturalism の現れであると主張している。例えば、香港の学界では教育現場におけるMIX を批判して、学生と教師両方によるMIX を禁止する論調になる。しかし、発表者が自説を述べようとするとき、広東語の中に英語を入れざるをえない状況に陥り、聴衆の失笑をかうことになるだろう (Li, 2002)。すなわち、香港におけるMIX を否定するのはもはや現実的ではない。MIX は言語接触の自

然な帰結であることを認識し、MIX の機能上の有用性を考える方が発展的である。

Gibbons(1987)による「MIX は、新語創造の過程にある」という主張は注目すべき知見である。今や中国系でなくても、香港育ちの若いインド系やパキスタン系の香港人なら、学校教育で中華系と一緒に広東語を学んでいるのでMIX を理解することができると思われる (Patri & Pennington, 1998)。MIX は中国系だけでなく、香港人全体のものとなりつつある。

今後MIX が新しい言語体系として発展するかは、非常に興味深い。社会における意義と役割についてさらに研究を深めたいと思っている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計5件)

(1) 金丸英美「返還後の香港における言語の行方 —「両分三語」政策をめぐる—」(査読無)東京理科大学紀要(教養編)第38号 153~169 (2006)

(2) 金丸英美「ポストコロニアル・マカオの言語と教育」(査読有)日本国際教育学会紀要『国際教育』第13号 107~113 (2007)

(3) 金丸英美「香港における英語広東語MIX 研究の動向について」(査読無)東京理科大学紀要(教養編)第40号 203~217 (2008)

(4) 金丸英美「小学校の英語教育を考える—香港の事例からの再発見—」(査読無)東京理科大学紀要(教養編)第41号 269~284 (2009)

(5) 金丸英美「返還から10年後の香港」(査読無)『英文学会誌』27号(両角千江子教授退職記念特別号) 149~155 (2009)

〔学会発表〕(計1件)

金丸英美 「二言語を学ぶことの意義を考える—バイリンガリズムの視点で検証する—小学校から大学に至る日本の英語教育」第46回 JACET 全国大会 (査読有) (2007) JACET バイリンガリズム研究会

6. 研究組織

研究代表者

金丸 英美 (KANAMARU FUMI)

東京理科大学・工学部・講師

研究者番号：40366430